

---

# アクアリウム

葛城響子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクアリウム

### 【NNコード】

N7540D

### 【作者名】

葛城響子

### 【あらすじ】

じづちゃんの水槽はまるで庭のようだ。

じづちゃんは金魚を飼っている。夏の縁日の金魚すべいで小父さん（じづちゃんのお父さん）に取つてもらつたものだ。お腹のあたりと背びれのところに赤い模様がついていて、他は銀色っぽい白の金魚だ。光の反射具合でキラキラと光つて見える。飼い始めたときには小さくて金魚鉢の中でも十分だったのに最近ではすっかり大きくなつてしまつた。それでは窮屈で可哀想だと小母さん（じづちゃんのお母さん）が言つたので金魚鉢より少し大きめの水槽で飼つことになつた。水をろ過する装置が前より立派になつて、砂利が底に敷き詰められた。

「あとね、水草を入れよつと思つんだ」

じづちゃんは金魚に餌を与えながら言つ。

それはいいかもね。このままじゃ、ちょっと寂しいと私は答える。少し間をおいて、どんな水草を入れるつもりなのと聞く。

じづちゃんは餌の袋を開じて片付けたあと、本棚から重そうな図鑑を取り出す。じづちゃんが開いたページにはたくさん水草の写真が載つていて、じづちゃんはその中のひとつを指さす。

「これだったら、大きさや丈もちょうどいい。それにあまり成長しない」

ねえ、じづちゃん。他には入れないの。

「あまり入れすぎるとじづちゃんが見えなくなるからね。金魚が見えなくなつてしまつ」

じづちゃんは図鑑を開じる。

耳をすますと水槽から水がコポコポと循環する音が聞こえる。それを聞いているとなんだかわけもわからず懐かしい気持ちが胸のあたりにせまつてくる。そして、同時に安心する。不思議だ。

「金魚は一体、どこを見ているのだろうね。」

ふいに、じづちゃんが言つ。

「ほら、金魚の田つてさ。僕らの田とはすこぶん違つだろ？僕らは田が合えばお互いが見えていいけど、金魚は田を合わせていても、何だか田が合つた気がしないんだよね」

金魚と田を合わせようとするなんて、じづちゃんは変わっているね。

「そう？ かずみちゃんはそんなことないの？」

今まで考えてみたことがなかつた。第一、私は金魚を飼つたことが無いからね。

「かずみちゃんも金魚を飼えぱいのに」

駄目だよ。うちはペットを飼つのは「法度だもん。

「そうか、残念だね」

うん。まあ、しょうがないよ。

私は藻が全くついていない綺麗な水槽を見つめる。一ヶ月に一度は金魚を別の容器に移して水槽と砂利を洗うのだとじづちゃんが言つていたことを思い出す。この水槽はすみからすみまでじづちゃんの手が行き届いているのだ。だから、汚れることは無い。じづちゃんは潔癖じみたところがあるのでなおさらだ。

この水槽はまるで庭のようだ。それもある程度自然のままにしておく日本庭園ではなく、何もかも計算しつくされたイギリス庭園のようだ。

この中で飼われる金魚は何を思つのだらう。私は金魚になつたつもりで口をパクパク動かす。

「へんな顔」

じづちゃんは笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7540d/>

---

アクアリウム

2010年10月21日02時25分発行